

幼児期に要求されるリトミック

三 好 良 枝

THE VALUE OF THE "RYTHMIQUE" IN CHILDHOOD

The "rythmique" is said to be very important in children's musical education of today. With Dalcroze (1865—1950) we make an investigation of the "rythmique" which promotes children's normal growth with regard to their age and mentality, and to the regional differences and Japanese nationality.

Yoshie Miyoshi

1. はじめに

幼児の音楽活動は我々が想像する以上に自由で創造的であり、豊かな可能性を秘めている。その生来の音楽的能力を目覚めさせ、さらに発展させるためには、幼児期の音楽的能力の発達段階を的確に捉え、どのような音楽環境が必要であるか、またどのような教育方法で育てていくかを研究、実践していくことがその教育に携わる者にとっての目的であり、課題である。エミール・ジャック・ダルクロゼ (Emile Jaques-Dalcroze 1865—1950) によって創案されたリトミック (Rythmique) は身体運動を通して音楽に反応することによって、芸術的思考、創造性を伸ばそうというものである。そこで、本論は活動の根源であるリズムと幼児との関係を捉え、次にダルクロゼの基本理念に触れ、さらに幼児期になぜリトミックが必要かを実践を通して考察するとともに、今後の課題を探っていきたい。

2. 幼児とリズム

人間の活動すべてがリズムの上に成り立っているといっても過言ではない。「人間の肉体の組織もまたリズムの法則に従っている。それは鼓動、呼吸作用および消化作用の規則正しい活動である。これからすこしでも免れることは、病氣と完全な崩壊、すなわち死につながるのである」^①と研究者、エルザ・フィンドレイも述べている。同様に我々を取り囲んでいる自然界にもリズムが存在している。太陽の出没、一年の周期、季節の交代など、これらのリズムを我々

は無意識のうちにも、捉え、反応している。このようにリズムは、我々にとって生命活動そのものを支配する程重要なものである。では、幼児の生活においてはどのようなのだろうか。幼児にとっては、活動のすべてが新しい経験の連続である。五感を通して経験し、その感じたことの反応が動きとなっている。この動きの反復、連続の過程でリズムに対する本能的な能力を発達させている。幼児が言葉を発するようになることは、リズムを伴った肉体運動の顕著な例であるといえる。以上のように、幼児の生活、活動—肉体運動—とリズムは切り離しては考えられないものである。ではダルクローズは、このリズムをどのように捉え、リトミックを考案したのであるだろうか。

3. ダルクローズの基本理念

我々は日常生活において、音楽にあわせ、自然に身体を動かしたり、足で床を打ったり、あるいは無意識に頭を左右に振ったりしていることがあるが、ダルクローズは生徒を観察して①て、こういった点に気付いた。そして身体は楽器であり、精神の働きに順応する協力者なのだ。そしてリズムを身体で感じることから「リズムは動きである。筋肉は動きのために作られている。動いている身体を考えないで、リズムを理解することはできない」と定義づけ、さらに「リズムの意識は、随意筋、不随意筋を問わず全ての筋肉の協力を要する。結局、リズムの感情をつくり出すための運動において、教育が施さなければならないのは身体全体なのだ」とリズムの知覚を身体で表現することを目的として、その訓練方法であるリトミックを考案したのである。ここでダルクローズの身体運動を理解する上に重要なことは、時間と空間とエネルギーの関係を掴むことであると思われる。ひとつの動作には、その出発点と終結点の間に時間と空間を要し、その動作を起すには力を必要とする。彼はこの時間と空間、力と身体運動の関係を、1907年に発表した論文「リズムへの手引き」の中で、八項目にわたって結論づけている。②この点について少し補足すると、マンハッタン音楽大学のエイブラムソン教授も身体運動において、これらの関係の調和をはかることが必要であると強調し、体得するためのいくつかのゲームを考案している。一例をあげると、2人で向い合って床の上に座り、音楽にあわせてボールをころがし、音楽のテンポが変わった場合、2人の距離（空間）ボールをころがす力、音楽のテンポ（時間）を考え、その調和をはかりながら行うゲームがある。私自身、このゲームを体験してみて、これらの関係を理解していると、動きに無駄がなくなり、自然になっていくことに気づき、このことを意識しているかどうかによって、その動きに大きな違いが出てくることを知る事ができた。次は理解する頭脳と実行する身体の問題である。子ども達は、むづかしいリズムは分析、理解できても、それを身体で表現することに困難を示していた。そこでダルクローズは「リズムを表現できる筋肉組織を持っているだけでは不十分であり、それに加えて何よりも、まず想像したり、分析する頭脳と表現する身体の間でコミュニケーションが確立されねばならない」と、述べている。③このことは幼児の頭脳の発達に身体運動が大きな役割

を果たしていることを如実に言い表わしている。さらに、同じ論文の中で「種をまく前に、私たちは土壌の下ごしらえをすべきである^⑧」とリトミックが基礎教育として重要であることを述べている。以上のような基本理念をふまえ、幼児に実践した場合、どのような効果を生み、そして能力を育てていくのか、またなぜ幼児期にリトミックが必要であるのかを考察してみたい。

4. 幼児音楽教育としてのリトミック

ダルクローズは子どもの音楽的能力は、すでに持って生まれてくるものと把握し、その潜在的な生来の能力をどのようにして幼い時代に目覚めさせるかという点を幼児音楽教育の目的のひとつにあげている。あるいは、数学者、横地清は、子どもはすでにゼロ歳から曲のもつリズムに反応して、体や手足を動かす。そして一歳でうたい、二歳ではうたいながら踊る。三歳からは、曲にあわせてスキップすることができるし、短いリズム・パターンを模倣することもできる。しかしこのリズム・パターンの模倣奏は四歳で急に上達して安定し、五歳で格段に上達するとは言えない。また主要三和音の識別については、四歳で確実になり、それから後の進みは遅い^⑨。と言っているが、このことは四歳までに音楽的基礎能力を環境から身につけてしまうことを、我々に示唆している。したがって、その時期までにその能力を発達させるための音楽的刺激を与える環境を整えることが必要であると考えられる。その環境として、幼児の動きの本質を捉え、脳作用を助け感覚機能を高めることに主眼を置いたリトミック教育が重要な役割を果たすと考える。近年、各地で民間のリトミック教室が開設されており、家庭内にも浸透しはじめ、保護者も関心を持ち始めている。

この民間のリトミック教室において、家庭環境、発達段階を考慮した4名の幼児を対象に観察を行った。

実践例

(A) 四歳男児 リトミック経験1年

教室にはいった当初はやや精神面の発達が遅れているように見えた。突如、身体を緊張させ、奇声を発したり、他の幼児とのバランスもうまくとれず、手をつながせると、相手がいやがる程、強く握るなどの動作が目立った。半年位過ぎた頃から奇声を発する回数が減りはじめ、名前を呼ぶと他の幼児と同じ大きさの声で、同じテンポで返事がかえってくるようになってきた。また、わずかではあるが教師の話の聞こうとするようになった。

(B) 三歳女児 リトミック経験6ヶ月

家庭では放任の状態にある様子でやや愛情不足の傾向が見られた。落ちつきがなく、すぐに教師や友達と手をつなぎたがり、注意が散漫で騒ぎ好きであった。現在もその傾向は多分にあるが、以前よりも音楽を聞いて反応できるようになってきている。ただ持続力に欠ける。想像、創造的活動においては独創的なものを持っている。

(C) 三歳女兒 リトミック経験1年半

家庭環境も良好で、精神面、肉体面ともに健全である。現時点では音楽を聴いての反応もしっかりしているし、音の記憶もできてきている。挨拶、返事もはっきりとでき、母親や教師の指示がなくても後片付けなどの手伝いができる。

(D) 二歳女兒 リトミック経験6ヶ月

始めて3ヶ月位までは、ただろろうろと動いているだけの状態であったが、現在では短時間ではあるが、他の幼児といっしょに音楽に合わせて、歩く、走る、止まるの反応が少しながら出来るようになってきている。

以上のような実践例を通してリトミックの効果を考えてみたい。幼児期にリトミックを体験することによって、注意力が芽ばえ、精神の集中力が高められ、一定の時間、精神を緊張の状態に置き、その緊張が持続できるようになってくる。この緊張の持続は精神と肉体をコントロールする力を生み、さらには反射性、思考力、記憶力を養うことができると思われる。幼児は動くことを非常に喜ぶ。動いて体験することによって、あらゆる感覚機能を育てており、この動きを繰り返し、そこから知性を働かせるようになる。つまり本能的な能力に音楽的刺激を豊富に与え、それに反応する身体全体を通じて潜在している感覚、感情を表現する能力を身につけることは、幼児期においてこそ、極めて重要であり、必要なことであると思われるのである。以上、実践を通してリトミックの効果、及び必要性をいささかの考察を加えて述べてきたが、おわりに、現代の社会状況とを考えあわせて、今後の課題を探っていきたい。

5. 今後の課題

音楽的能力の発達の度合いが著しい四歳までに、身体運動を伴った音楽的刺激を与えることが重要であり、その方法としてリトミックが効果的であることを述べてきた。ダルクローズは、1919年に発表した論文「リズムと拍子と気質」の中で民族性の違いによるリズム感覚の相違を述べているが、我が国においても、その国民性による音感やリズム感を無視することなく、そのことをふまえた指導方法を創意工夫することが必要である。加えて多様化している音楽環境、あるいは都市、農村といった地域性、さらには技術の進歩による生活環境の変化、核家族化、共働きの家庭など、家庭状況や社会状況の変化を考慮にいれ、幼児の発達段階を心理学、教育学、生理学、医学の分野からも学び幼児独自の指導方法を体系化していくことが、今後、我々に課せられた課題であると思われる。

ま と め

1. 豊富な可能性を秘めている幼児の能力を目覚めさせ発展させるための音楽教育としては、リトミックが最も適していると思われる。
2. 幼児は生まれながら肉体運動をしており、またその活動全てがリズムを伴っている。幼児の生命活動自体がリズムである。

3. リズムは身体運動を通して経験し、その表現のためには、時間と空間とエネルギーの関係をつかみ、さらに理解、分析する頭脳と実行する身体のコミュニケーションが必要である。
4. 音楽的能力は生来持っているものであるが、幼児の環境と教育方法がその発達に非常に影響する。音楽的刺激を豊富に与えるリトミックが効果的である実践例を示した。
5. 国民性、地域性さらに現代の社会状況を考慮し、他の分野からもその研究成果を学び今後の指導に創意工夫が必要であり、それを体系化していくことがこれからのリトミックの課題である。

<参考文献>

- 注① エルザ・フィンドレイ著・小野進訳：リズムと動き 全音楽譜出版社 P 8
- ② フランク・マルタン編著・板野平訳：エミール・ジャックーダルクローズ 全音楽譜出版社 P 302
- ③ エミール・ジャックーダルクローズ著・板野平訳：リズムと音楽と教育 全音楽譜出版社 P 41
- ④ 注2 同書 P 304
- ⑤ 注3 同書 P 41～42
- ⑥ 注3 同書 P 64
- ⑦ 注3 同書 P 66
- ⑧ 注3 同書 P 49
- ⑨ 季刊音楽教育研究 No.29